

国
語
B

(90
分)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問

次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、表記の一部を改めた)。(60点)

四〇歳を迎えようとしていたクロード・モネは、苦悩の日々を送っていた。その前年には、長年連れ¹つた妻カミーユを失った。モネが日本趣味を露わにした作品(ラ・ジャポネーズ)のなかで、着物をまとって可愛らしい笑顔をみせていた女性である。²

彼女は二人目の子を産んだ時からずっと体調がすぐれず、一八七九年の九月五日の朝に亡くなった。悲しみも束の間、^a画家としての本能なのか、彼女の肌にあられた色の変化をとどめようと、モネは妻の死顔を描いている。

一八七四年、三三歳の時にパリで開いたグループ展で、彼は目に映る視覚印象をそのまま描いた作品を発表した。後に「第一回印象派展」と呼ばれるようになるこの展覧会で、彼はふたつの改革を美術史にもたらした。^A

ひとつは、筆触分割と呼ばれる理論である。太陽光をプリズムに通すと七色に分かれることはご存知だと思う。これら七色はR(赤)G(緑)B(青)という「光の三原色」を混合させて作ることができる。モニターの色調整をこの三色でおこなうのはそのためである。そしてそれらをすべて混ぜると白になる。言い換えれば、自然の色は混ぜると明るくなっていくのだ。

一方、人工色ではそうはいかない。人間が色を作る際には、Y(黄)C(空色、シアン)M(赤紫、マゼンタ)の「絵具の三原色」からさまざまな色を作り出す。プリンターのインクに黒とこれら三色があるのもそのためだ。そしてこれら三色をすべて混ぜると黒になる。つまり、自然の光と異なり、絵具の色を混ぜていくと暗くなっていくのだ。

このことから、彼は自然光に含まれない絶対黒をパレットから排除し、さらにできるだけ明度を下げないよう、色をなるべく混ぜないで原色に近い状態で描く方法を編み出した。たとえば、緑色を描きたいなら、空色と黄色を並べて描けば、遠目からは緑として認識されるといった具合に。

第二点は、人間の知覚認識システムの正しい把握によってもたらされた。モネが第一回印象派展に出品したなかに、土手に咲く花々を、ただボンと置かれた色の群れとして描いた作品がある。それまでは、花びらの輪郭線まできっちり描かれ、陰影までつけられて初めて花の絵とみなされていた。しかし実際には、私たちは土手に咲く花々の形まで一枚一枚しつかり見て

「花だ」と認識しているのではなく、土手で風にゆられている色の集まりがあれば、それを「花だ」と知覚する。要するにモネの描き方のほうが人間の知覚認識システム上は正しいのである。モネが相当な理論家だったことがおわかりになると思うし、印象派とはまさにモネによる一大実験だったと言つて良いだろう。

しかし、展覧会は批評家たちによつて酷評され、来場者たちの笑いの種となり、興行的にも失敗に終わった。同じ年のサロン(官展)が一ヶ月ちよつとの会期中に四〇万人もの集客があつたのに対し、ほぼ同じ日数開催された印象派展は約三五〇〇人にとどまつた。最終日に至つては五四人しか来なかつたことがわかつている。パリの写真館の上階を借りておこなわれたが、開催にかかつたコストすら回収することができずに終わった。

状況は、二年後におこなわれた第二回展でも変わらなかつた。二〇名の画家が出展したが、先述したモネの(ラ・ジャポネー)など数点が売れたほかは低調に終わり、「絵画らしきもの」と記事に書かれるなど散々な結果に終わった。そして、さらにその翌年の第三回展も嘲笑の的であり続け、最終日におこなつた競売の結果も芳しいものではなかつた。

その頃、わずかに二〇フラン(現在の三万円ほど)の支払いができないから少しでも貸してくれ、といった内容のモネの手紙も残っている。結局、同様に貧窮にあえいでいた盟友ルノワールとシスレーはサロンに応募する決心をした。サロンに入選して初めて画家として認められ、そうでなければ生計がたたない時代だ。保守的なアカデミズムに反抗するためにサロンへ応募しないことを不文律としていた印象派グループだが、こうして彼ら二名は次の印象派展への不参加が決まつた。

モネの心は揺れていた。彼が中心となつて始まつた印象派だが、彼もまた日々の生活に困つていた。妻カミーユを失つた一八七九年に開かれた第四回展は、裕福で献身的なギユスターヴ・カイユボットが世話役のような立場にあつた。モネは彼にいったんは不参加を告げたが、仲間内の誰もが実力を認めるモネを欠くことをカイユボットは恐れた。根気強い説得の果て、結局モネは出展している。

しかし、かねてより印象派の名前が気に入らないドガの強い主張によつて、第四回展は独立芸術家展の名で開かれた。この展覧会で初めて印象派は黒字を出したが、しかしグループがもはや当初の形を失い、内部対立さえ起きていることは誰の目にも明らかだった。その年のサロンでルノワールは富裕層の肖像画を出品し、経済的安定を手に入れたつた。

一方のモネはまだ困窮をダツ³する糸口を見つけれないまま、家では八人の子を抱えていた。うちふたりはカミーユが遺した子であり、あとの六人はアリス・オシュデの連れ子だった。彼女はもとモネのパトロンだった実業家の妻だが、夫が破産して逃亡してからはモネのもとにいた。病床のカミーユを看病したのはアリスであり、カミーユの死後は内縁の妻となっていた。ただ世間の目もあつて、入籍するのはそれから一三年も後のことになる。

結局、一八八〇年の第五回展には参加せず、モネは一〇年ぶりにサロンに応募して入選を果たした。グループからは裏切り者^Bと見られたに違いない。しかしこの一步によつて、彼は迷いを吹っ切れたようだ。個展を開いて作品が数点売れ、さらに画商ポール・デュラン・リユエルとの関係は強固なものとなった。

モネの絵を独占的に扱うようになったこの腕利きの画商は、少しずつだが着実にモネの購買層を開拓して画家に経済的安定をもたらしていく。おかげでサロンに再度挑戦する必要もなくなった。デュラン・リユエルが生涯で手掛けたモネ作品の数はなんと千点にものぼる。

モネはパリの画壇を一時忘れようとするかのようにポワッシーへ転居し、ほうぼうへ制作に出かけた。特にノルマンディーの海岸で描いた作品は好評をほくし、彼の筆の迷いも消えていった。そして取材旅行中に立ち寄った場所のひとつがジヴェルニーであり、そののどかな可愛らしさを気に入った彼は、一八八三年、四二歳の時にジヴェルニーに家を借りる。ポワッシーへの引越しも、そこからジヴェルニーへの転居費用もデュラン・リユエルが出している。

とても幸せです。ジヴェルニーは私にとって最高の地ですから。——モネから批評家テオドール・デュレへの手紙より
(筆者訳)

ジヴェルニーは、パリから海に向かってセーヌ河を三分の一ほど下ったところにある。モネが引越した時には、まだ三〇〇人ほどの農民が暮らすばかりの小村にすぎない。セーヌの支流のエプト川のせせらぎが心地よく、濃い緑色の森がまわりを囲む。この地で彼は借家ながらさっそく庭造りを楽しみつつ、写生をしに近隣の街や村へ精力的に出かけていった。

ジヴェルニーに移つて以降、彼の様式の確立にとつて大きく作用したのが、いくつか手がけた連作絵画である。最初の作品は收穫期に麦畑に置かれる積糞^{つみわろ}をモチーフとした。人や動物が主たるモチーフだと、描く者も観る者も、目はモチーフの表情やポーズなどを追つてしまう。その点、積糞であれば純粹に光がその表面に与える色の變化にのみ注意を払うようになる。時間を変えながら積糞を描いた二〇点ほどの連作により、モネはついに光が創り出す色彩の多面性を初めて描き留めた画家となつた。七年間の借家生活に飽き足らず、彼はジヴェルニーで家と土地を手に入れたいと強く願うようになった。今度もまた、資金提供をしたのはデュラン・リュエルである。画家はいつものように、あなたのために傑作を用意しています、と手紙で訴えている。このあたり、モネはちやっかりしたものだ。この頃にはモネの作品は高値で安定的に売れるようになっており、相変わらず貧困にあえぎながらただひとり、すべての印象派展に出品し続けるピサロが、「モネの作品ばかり売れる」と息子宛ての手紙でこぼしている。

ジヴェルニーの土地を入手した頃、モネは決定的な連作に着手している。今度のモチーフはルーアン大聖堂である。セーヌ河をさらに下つたところにあるルーアンは、下流域で最初に橋が架けられた場所だつたため、古くから発展した。つまりそこより下流では、橋を架けるにはセーヌの川幅が広すぎたのである。

中世にはノルマンディー地方の主要都市となり、一二世紀末には巨大な大聖堂が建てられた。その後何度も火災や攻撃によつて被害を受けたが、その都度改修されて今に至っている。そしてこの街でかつて市場がたつていた広場は、^(注5)ジャンヌ・ダルクが火刑に処された場所だ。一四三一年五月三〇日のことで、⁴一九歳の乙女が生きたまま焼かれた場所には、薪を積み上げるための石の環台が残っている。

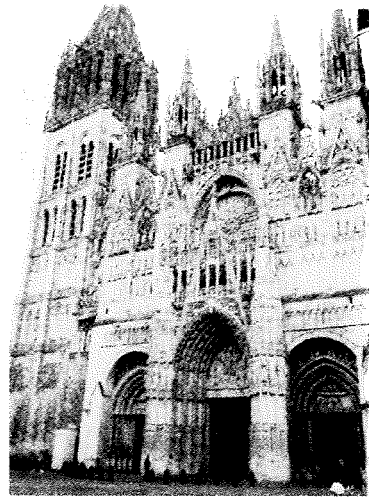


図 ルーアン大聖堂

大聖堂の斜向^はかいにある建物の上階に間借りして、モネはひたすら筆を走らせる。大聖堂のファサード(正面)を描いた三〇点のうち二八点が、わずかに異なるものの、ほぼ同じ視点から描かれている。彼は二年にわたって同じ試行を二度繰り返し、ジヴェルニーに帰つてからもスケッチをもとに連作を仕上げ

た。積藁が視点をさまざまに変えて描かれていたのに対し、大聖堂はほぼ定点観測と言ってよい。太陽は、刻々と位置をずらしながら、同じ場所で動かないフアサードにさまざまな色を映し出していく。時間ごとの純粹なる光と色彩の変化だけを追った試みは、当然ながら美術史で初めての挑戦となった。

モネ自身もその価値がわかっていたのだろう、彼はこの連作を一枚あたり一万二千フランもの額でデュラン・リュエルに買い取らせている。わずか二〇フランが払えずに無心の手紙を出していたのが遠い昔のようだ。そして一八九五年五月には、うち二〇点がこの画商が経営する画廊で展示された。モネの重要性はいまや誰もが認めるところとなっていた。

よく知られているように、モネはジヴェルニーの庭を日本風にしようとした。池にかかる太鼓橋は、歌川広重の浮世絵に似せて造られ、睡蓮すいれんや藤、梅や桜などを好んで植えたのも、それが日本のイメージと強く結びついていたからこそだ。出先から「私の日本の牡丹ぼたん」の世話を怠らないで、と家族に宛てた手紙もある。画家・児島虎次郎や実業家・松方幸次郎（注7）がここを訪れた際には、婦人たちの着物を絶賛したりと、日本への愛は終生変わることがなかった。ジヴェルニーの名はモネの存在だけで世界中に知られるようになり、アメリカなどから多くの画家が移り住んで来た。その数は三〇〇人を超え、偶像視されたモネは、かつてのジヴェルニーの静けさが失われることに苛立いらだったこともある。

彼は庭造りに非常に情熱を傾け、それは八六歳で亡くなるまで続いた。しかし六七歳頃から白内障が進行し、七〇歳の時に妻アリスを失う。その三年後には、存命中にルーヴル美術館に作品が収蔵される初めての画家となるエイヨ（注9）に浴したが、一方で長男に先立たれて深い悲しみに沈んでもいる。そしてヨーロッパを第一次世界大戦の暗雲が覆う。

モネは六〇歳頃から庭の池の睡蓮を描き始め、そのまま晩年のライフワークとなった。長年にわたる連作は、同一モチーフを描き続けた古今東西の連作のなかでも、その点数の多さと期間の長さで突出している。眼病のせいで徐々に白っぽくなり、時には明るくなり、時に暗くなる。ほとんど霧もがかかったような薄い色調もあれば、どぎつい原色で塗られたものもある。手の動きも衰えていくにつれ、細かな筆遣いが消え、おおらかな面的処理が支配していく。睡蓮の連作は、この偉大な長寿の画家の老年様式への移り変わりを見事に示してくれている。

彼は八〇歳過ぎから、フランス国家と「睡蓮」の大連作の制作契約を交わしている。これが現在パリのオランジュリー美術館（注10）

の特別室の壁一面を覆っている長大な連作である。彼は公開を待たずに世を去ったが、芸術家人生における集大成であり、印象派の終焉^{しむらん}を告げる作品となった。そしてそれはまた同時に、先に亡くなった妻子や友人、仲間たちの弔いであり、大戦で失われた多くの人命への鎮魂歌だったのだ。

(池上英洋『フランス 26の街の物語』による)

池上英洋『フランス 26の街の物語』／光文社叢書

(注) 1 クロード・モネ——フランス印象派の代表的画家(一八四〇〜一九二六)。本文において触れられている、ルノワール(一八四一〜一九一九)、シスレー(一八三九〜一八九九)、ギユスターヴ・カイユボット(一八四八〜一八九四)、ドガ(一八三四〜一九一七)、ピサロ(一八三〇〜一九〇三)は印象派に属する画家または印象派を支援した画家。

2 サロン(官展)——フランスの公の機関によって行われる定期的な展覧会。一九世紀において、出品作品の審査員はアカデミーからの指名制になり、その規準は厳しく、保守的価値観に固執して、しばしば多数の作品を落選させた。

3 ボール・デュラン・リュエル——フランスの画商(一八三一〜一九二二)。

4 テオドール・デュレ——印象派を支持した批評家(一八三八〜一九二七)。

5 ジャンヌ・ダルク——フランスの愛国的少女(一四一二?〜一四三二)。一三歳の頃聞いた「フランスを救え」との神託を信じて出陣し、イギリスとの戦争においてフランスを勝利に導いたが、のちにキリスト教における異端者とされ、火刑に処せられた。

6 太鼓橋——太鼓の胴のようにまん中が半円形に反った橋。

7 児島虎次郎——洋画家(一八八一〜一九二九)。印象派的な画風をもつ。

8 松方幸次郎——明治から昭和にかけての実業家、美術品収集家(一八六五〜一九五〇)。

9 ルーヴル美術館——パリのセーヌ河右岸、ルーヴル宮殿内に設置されたフランス国立美術館。名作を数多く収集・展示する世界最大級の美術博物館の一つ。

10 オランジュリー美術館——パリにある国立美術館。一九二二年、オランジュリーでの展示方法を示した図面を承認したモネは政府に自作を寄贈する契約を結び、モネが亡くなった半年後の一九二七年に「睡蓮」の壁画が正式にオランジュリーで展示された。

問一 傍線部1～5のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めよ。

問二 波線部a、波線部bの「画家」という表現について、その特徴を説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア aはモネが職業人としての画家であることを示す表現である。一方、bは一般的な意味での「画家」という意味で使われており、モネが凡人画家にすぎず、絵についての特別な才能がないことを示している。

イ aはモネが凡庸な画家であることを示す表現である。一方、bは「モネ」と言い換えても問題ない箇所であり、個人名で表現することと比べ、突然、話の流れが変わったかのような印象を読者に与えている。

ウ aはモネが生粋の画家であることを印象づけている。一方、bは「モネ」という個人名に言い換えられる部分であり、個人名で表現しないことで、モネ自身の経歴を重視していないということを示している。

エ aはモネが並の画家であることを強調する表現である。一方、bはモネ自身を含む印象派画家全般を指し、デュラン・リユエルがモネの他に支援した対象が、特定できないほど多くいることを示している。

オ aはモネが生まれつきの画家であることを印象づけるものである。一方、bは「モネ」と言い換えることが可能な部分であり、個人名で表現するのと比べ、出来事をより客観視している印象を与えている。

問三 傍線部A「ふたつの改革」とあるが、この「改革」でモネが編み出した二つの手法とはどのようなものか。二つの手法について、それぞれ説明せよ。

問四 傍線部B「グループからは裏切り者と見られたに違いない」とあるが、サロンに出品することが「裏切り者」と見られることになる、当時の印象派の状況について、一〇〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部C「彼の様式の確立にとつて大きく作用したのが、いくつか手がけた連作絵画である」とあるが、「様式の確立」と

「連作絵画」との関連について説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 積藁をモチーフとした連作においては、人物等をモチーフにするものと異なり、光が積藁の表面に与える色の変化にのみ注意をする必要があったため、モネは光が作り出す色彩の単一性を初めて紙面上に描き止めた画家となった。

イ ルーアン大聖堂をモチーフとして、そのファサードを描いた連作絵画のほとんどが定点観測的に描かれており、この作品群では美術史上で初めて、太陽によつて作られる、時間経過に伴う光と色の変化だけを追う試みがなされた。

ウ ルーアン大聖堂のファサードをモチーフとして描いた連作は、光の具合によつて変化する色と光を角度を変えながら表現することに成功しており、モネの作品が世間に認められ、高値で取引されるようになったことにつながった。

エ モネの晩年の作品である睡蓮の連作は、対象物そのものを観察して描くという日本画の影響を受けていることと、おらかな画面処理の与える印象が高く評価されたことから、ルーヴル美術館に展示されるほどの代表作となった。

オ 六〇歳ごろから作られた睡蓮の連作は、明度、色調ともに細かな描き方をしつつ、おらかな画面処理も行うようになっており、積藁やルーアン大聖堂の細かなタッチで描くだけのものとは異なる老年様式の特徴が示されている。

問六 傍線部D「それはまた同時に、先に亡くなった妻子や友人、仲間たちの弔いであり、大戦で失われた多くの人命への鎮

魂歌だったのだ」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。筆者の考えについて推論したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア モネの二人の妻は、モネの作品が世に認められてからモネとともに暮らしはじめ、モネが印象派としての画風を維持したり作品を管理したりするという重要な役割を担っていたと考えられる。このことから、モネより先に亡くなった妻たちの生きた証として「睡蓮」を見なすことができ、「睡蓮」を描いたことが彼女たちの魂を慰めることにつながると考えているから。

イ 一人目の妻であるカミーユが亡くなったとき、モネは彼女の顔の色の変化を留めるために死顔を描くことにしたが、このことはモネの画風の確立につながることとなった。これは、のちの第一回印象派展における絵画の改革につながる出来事となったため、カミーユは印象派の礎となったという意味で、モネが弔いの念を向けるに相応しい相手だと考えているから。

ウ 印象派として活躍したルノワールら、あるいは印象派の画家を支持したドガや画商たちといった仲間は、モネが中心になって始まった印象派の支えとなった人たちであった。彼ら印象派にまつわる人びとの業績が集約されるかのような時期に描かれた「睡蓮」の連作は、仲間たちの功績を称え、彼らの死を弔うためのものとして捉えることができると考えているから。

エ 印象派とともに活動したピサロは、かつてモネに直接「モネの作品ばかり売れる」という愚痴をこぼし、結局彼の生前に作品は売れなかった。そのため、印象派の作品の集大成である「睡蓮」を描き、ピサロとともに過ごした日々もこの作品に生きていると示すとともに、国と契約することでピサロの魂を慰め、遺族に経済的支援をしようとしたと考えているから。

オ ヨーロッパを中心に勃発した第一次世界大戦により、戦死者が多数でてしまい、社会は暗く陰鬱な雰囲気包まれてしまった。しかし、ひたすら明るく鮮やかな色彩をもつ「睡蓮」の連作がオランジュリー美術館で展示されたことで、社会は明るさを取り戻して生き残った人々に希望をもたらしたことに加え、戦死者たちの魂も慰められただろうと考えているから。

第二問

次の文章は、大正一二（一九二三）年に発表された豊島與志雄^{とよしまよしお}「小説中の女」の一節である。この文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

「明日の朝から小説を書かなければならない」作家の「私」は、鎌倉の友人宅で遊んだ帰りの夜、急いで停車場へ駆けつけ、東京行きの汽車に飛び乗った。翌日の朝から書き初める予定の小説は、頭の中では大体出来上っていたものの、ただ一つはつきりしない点として残っていたのは、「小説の中に出てくる女性みさ子の面影」だった。車内でいつしか創作の方に心を向けながら目を閉じた「私」が騒々しい呼売の声に我に返ると、斜め正面の女に視線が惹きつけられた。

「みさ子だ！」

でも私は別に驚きはしなかった。私の心はいつでも、自分の前にみさ子を見出すことを予期していた。ただ不思議なのは、鎌倉からその時まで、どうして彼女に気付かなかったのだろう？ 彼女は何処で汽車に乗ってきたのだろう？ 鎌倉よりも前から乗ってたのだろうか、或は鎌倉で私と一緒に乗ってきたのだろうか？……でもそんなことはどうでもよかった。彼女が果してみさ子であるかどうか、それが最も力¹ンヨウなことだった。横顔でそうだと思つたのが、正面から見ると全く別人であるようなことも、よくありがちである。期待通りになるか或は期待が裏切られるか、それに対する不安の念から、私は先ず車室の中を見廻してみた。

文学通らしい三人の青年、会社員風の二人の男、料理屋の女中と番頭といった風の男女、実業家らしい半白の男、三人の海軍士官、それだけが全部の乗客で、飛び飛びに腰掛けながら、ひそひそと話しているのもあれば、退屈げに窓の外の闇を透^{すか}し見てるのもあれば、夕刊を拡げてるのもあったが、多くは窓にもたれてうとうと居^い睡^{ねむ}っていた。そして誰も私の方へ注意してる者はいないしかった。車室内の空気までが静かでぼんやりしていた。で私は安心して、斜向うの彼女をじっと見調べてやっった。

彼女は見た所、二十七八歳くらいしかった。それが一寸困った。みさ子は二十一二歳でなければいけなかった。けれど、年齢の差くらいはどうにでもなる、と私は思い返した。硬^こばった額の皮膚を、蠶^{むく}のありそうな柔かい薄い皮膚に代え、眼の奥の潤みを多くし、唇の肉付を薄め、指の節をまるめ、爪の生え際の深みを浅くし、首筋の肉をぼやぼやとさせれば、それで若やぐのだったから。

そんなことを考えてるうちに、汽車はもう進行しだしていた。彼女は向き直つて、控え目な視線でちらと車室の中を刷いて、それからぼんやり、膝の小型な金縁の書物に眼を落しながら、いい加減に読んでいる——というよりも寧ろ、取り留めもない夢想到^{ふけ}耽^{ふけ}っているらしかった。その正面の顔立を見て、私は一寸息をこらした。みさ子そっくりだったのである。

房々とした髪の影響を落してる彼女の額は、心持ち狭くて淋しみを湛^たえていた。白々としたその皮膚が、余り広くない知識を思わせた。理解しようとすまいと、そんなことに頓着なく、一種の皮肉と憂鬱とで、何かしら自分にも分らない要求から、翻訳小説を読み耽^{ふけ}つてる、みさ子の額、小さな活字の上に屈^{かが}めた額、そのままだった。——ずっと一筆で刷いたようにくつきりとして、細長く消えてる淋しい彼女の眉が、みさ子の眉に丁度ふさわしかった。未来の劇作家を以て自任してる或る大学生と、みさ子は恋をしていたが、余り長続きしそうなもないその恋を思わせる眉だった。——彼女の眼は、妙に見透せない影に包まれて、その底に何か冷たいものを含んでいた。脹^{ふく}らみのない薄い眼瞼^{まぶた}、長い睫毛^{まつげ}、小さな黒目、そして眼尻にあるかないかのかすかな凹^{くぼ}み。私はその伏せられてる眼をじつと窺^{うかが}つて、一寸みさ子からはぐらかされた気持になった。みさ子ほもとと露わな眼付を持つてる筈だった。然し今に彼女の眼が挙げられて、私の方を向いたら、或はみさ子の眼になるかも知れない……などと考えて、私は彼女の視線を待ち受けたが、彼女はいつまでも私の方を見てくれなかった。で私は眼を後廻しにして、先へ進んでいった。

彼女の鼻は、日本人にしては高すぎるくらいに、急角度で細く聳^{そび}えていた。或は鼻筋の上の一際濃い白粉^{おしろい}のせいで、そう見えるのかも知れなかった。が何れにしても、みさ子の鼻はそれほど高くなってよかった。遠くから見ても、鼻が眼につく顔立ではなかった。然し或は彼女の鼻も、高いわりに細そりとしてるので、遠くから見たら余り眼につかないかも知れない……。が

それは大して関係のないことだった。ただ真直な鼻であることだけで沢山だった。——頬の工合は、全くみさ子そっくりだった。肉附が薄くて、興奮したら益々蒼ざめてゆきそうな頬、一人で思い耽つていて、微笑の影のさすことがない頬だった。その蒼白い皮膚の下には、或る神経質なものが漂つていた。みさ子はどんな姿態^{なり}をしても、またどんな夢想の折にも、時々多くの女がなすように指先で軽く頬を支えることがなかった。またその頬へ、決して接吻を許さなかった。或る小さな新劇団にはいつていた頃、有名な劇作家が酒の上の戯²れで、その頬に接吻しようとした時、口ならいいけれど頬^ほ辺^べはいやと答えたのは、今でもその方面の話柄に残つていた。——彼女の口元から頤^{あご}も、みさ子に丁度ふさわしかった。心持ちしやくれながら長めに尖つてゐる頤と、きつと結んだ冷たそうな唇とに、何かしら堅固な意志表示が見えていた。少し皺^{しわ}のある歪^{ゆが}みがあるその唇は、齒並の悪さを想像させた。みさ子は或る時恋人の大学生と郊外散歩に行き、子供らしくはしゃぎ出して、歩きながら林檎を皮のまま嚙^かつた。嚙り取つた林檎に、凸凹の小さな前齒の跡がついた、まではよかったが、林檎の皮が齒の間に方々はさまつて、恋人の持つてるマツチの棒を楊枝に使つても、どうしても取りきれないで、長く不快な氣持を味わされたのだった。——彼女の襟元には、すぐ眼につく大きな黒子^{ほくろ}があつた。それは私もまだ、みさ子に想像していないことだったが、みさ子にくつつけても非常によく似合いそうだった。

A この黒子という新発見に、私は一寸嬉しくなつて微笑みながら、水色の襦袢^{じゅばん}の襟からそれが覗き出してるのを、いつまでも眺めていた。そのうちに、汽車は戸塚と程ヶ谷^{ほどがや}との間の隧道^{トネル}にはいつた。耳鳴りがするような大きな響に、車内の電灯の光が少し薄らいで、茫^{ぼう}とした盲^{めし}いた明るみになつた途端、彼女は俄^{にわか}に顔を挙げて、私の方に眼を据えた。変に空虚な眼付だった。その底にあるものが、温情であるか或は敵意であるか、私は一寸見定めかねて、知らず識らず眼を外らした。そして隧道を出てしまつてから、私はまた彼女の方へ眼をやつた。彼女はまた私の方を見ていた。びくともしない高飛車な眼付だった。私はその底に、みさ子の怒つた時の眼の光を見て取つた。軽蔑的な無関心さに包まれてる鋭い眸^{まぶた}だった。先程から私がしきりに眺めていたことを、彼女は知つてゐるに違ひなかった。別に他意あつて眺めたわけではないけれど、それでも私は少ししてきてきた。窓の方を向いて、遠く闇の中に走つてゆく点々とした灯を、ぼんやり見送つた。けれど頭の中には、みさ子の顔立がはつ

きり浮彫になされていた。

程ヶ谷を過ぎた時、私はまた彼女の方へ眼をやった。その瞬間に、彼女の眼がまた私の方へ向いて、私の視線を押し返した。私は眼を伏せた。すると、ぶ厚いフェルトの草履にのつかつてゐる彼女の足先に、丁度私の眼は落ちた。一分のすきもなく白足袋にきっかりはまつて、長そうな指先の揃った、平たく踏み広げられていない、恰好のよいちんまりした足先だった。みさ子にもこういう足先を与えてやろう、と私は思った。そしてまた我知らず、彼女の身体を見調べ初めた。井桁くずしのお召の着物が軽やかに垂れてる下に、彼女の足はすうりと伸びてゐるしかなかった。みさ子にもそういう長い足がふさわしかった。ただ彼女の方は、どんなに想像しても跛足^{(注4)びつこ}ではなさそうだった。然しみさ子は、一目では分らぬくらいのかすかな跛足だった。

女学校の二年の時、不意の失火で家が焼けて——それ以来一家は零落しみさ子は学校を退^きつたのであるが……その折左足を挫いて、それが膝関節の神経痛となり、今でも時々痛むことがあつた。そして向う脛の両側に、大きなお灸の跡が二つついていた。そういうお灸の跡なんかは、彼女の足にはなさそうだった。がそれは外から見えないことなので、まああるものと想像しても事は足りた。——ただいけないのは、彼女の胴体の容積だった。墨絵式の雲をぼかした中に円に鳳凰や竜の古代更紗模様^{(注5)きりぎり}を入れた羽二重の帯で、固くしめつけられてはいたけれど、鳩尾^{みぞおち}から腹部へかけて、大きな山腹を思わせるような、ぼつてりとした容積で肉がついていた。がみさ子はそれほど偉大な胴体を具えてはいなかった。何処か腺病質^(注6)な弱々しい体だった。その上、彼女の肩の肉附も、みさ子には少し重々しすぎた。ただ肩がすうりとこけて首筋が長いのは、みさ子そっくりだった。

その時彼女は、私の視線を感じてか、一寸ぴくりとした身振で両手を挙げて、着物の襟をつくろい^{(注7)うしろめ}、細縮緬^{ちりめん}の羽織の前をかき合せ、両の袂を膝の上に重ねた。その指先を見て、私は眼を見張った。それは全くみさ子の指だった。蛇のようによく物に絡みつく、長いしなやかな指、膝の神経痛と関係のある、一種病的な神経質な精緻な触感を持つてゐる指、そして円く反った細長い爪。みさ子はピヤノと編物とに適した手を持っていたが、まだどちらも習つてはいなかった。けれども不精なためか或は習癖からか、否恐らく無意識的な感情から、洗濯を非常に嫌がっていたし、手先や爪を大変大事にしていた。そして化粧をする時の指先が極めて巧妙だった。

汽車は横浜に着いた。料理屋の女中と番頭みたいな二人連れは降りたし、実業家らしい半白の男も降りた。車内が前よりも一層広々とまた白々しくなった。彼女が私の方をじろじろと、明らさまに而も偷み見しんみの体で眺めるので、私は窓の方にまた顔を外に向けて、眼をつぶった。みさ子の立像がはつきり頭の中に出来上つていた。大理石に刻まれたように、揺ぎのない正確な形かたち体を具えていた。私はそれに向つて心で微笑みかけながら、いつしかうとうとしかけた。汽車の速力は前よりもずっと早くなった。闇の中を疾駆する明るい車室の中が、夢の世界のようにやさしく快かった。私はうつとりとした眼を半ば開きながら、彼女の方を親しげに而も無関心にうち眺めては、またその眼を閉じて、頭の中のみさ子に微笑みかけた。そんなことを何度もくり返してゐるうちに、本当に眠ってしまった。

ざわざわする物音にふと眼を覺すと、汽車は停つていた。もう東京駅に着いたのかと思つて、半ば腰を上げた時、それは新橋駅であることを知つた。と同時に、彼女からじつと見られてるのを感じた。私は一寸狼狽ろうたひした氣持になつて、浮した腰を下しながら、てれ隠しに煙草を吸つた。他の乗客はみな降りてしまつて、車室には私と彼女と二人きりだった。汽車が動き出した時には、私は半ば夢の中にいるような呆けた氣持だった。

彼女は真正面を向いて、もう書物もしまい、両手を膝に重ねながら、じつと身動きもしないでいた。その視線が、私のすぐ側の窓から外へつきぬけてるのを、私ははつきり感じた。そして私はまじまじと彼女の顔を見つめた。みさ子が六七歳年を重ねて、其処に坐つてゐるのだった。「みさ子さん」と私が云つたら、彼女は眼尻のかすかな凹みに微笑の影を浮べて、「え、なあに？」と答えながら、私の方へ親しい眼を向けそうだった。そしたら私は、「随分早く年を取りましたね、」と云つてやつたであらう。

それは実に変へんな氣持だった。彼女の方を——みさ子の方を——見ては悪いような、また見ないで澄してゐるのも本意ないような、どうしていいか分らない氣持だった。彼女はやはりじつと正面の窓から、夜の都会の上を眺めていた。

東京駅に着いても、私はまだぼんやり腰を下していた。が彼女はすぐに立上つて、柵の上の手提と革の紐のついた日傘とを取つた。私もその真似をして、帽子とステッキとを取つた。彼女はちらと私の方へ視線を投げて出て行つた。私は変に置きざ

りにされた気持で、一寸間を置いてから ^{プラットホーム} 歩廊に出た。彼女が草履ばきのすらりとした足で、出口の方へつと歩いてゆくのが見えた。私はその後姿へ向つて、「さようなら、みさ子さん！」と心で呼びかけておいて、電車に乗り換えるために、彼女と反対の方へ歩きだした。

^C 私はみさ子の小説を書かなかつた。書けなかつたのである。書こうとすると、その面影が余りにまざまざと、丁度多年馴れ親しんでる妻とか妹とか、そういった近親の者のように、余りに身近く現れてくるのだつた。小説の構想はみさ子をつき離して遠くから眺むる手法の上に立てられていたので、みさ子の面影が余り目近に迫ってくると、遠近法がうまく取れなかつた。でそれを書くには、手法から従つて構想までも立て直す必要があつた。私はそれを他日のこととして、約束の雑誌社へは、他の短いものを書いて送つた。みさ子は私にとつて、一人の親しい生きた女性となつていた。

それから三四ヶ月過ぎて、或る秋晴れの日に、私は友人と連立つて、郊外に住んでる ^b 懇意な女洋画家を訪れた。彼女は自分の家に、小さなアトリエと広い庭とを持っていた。私達は庭の草花を見ながら、アトリエの中で雑談を初めた。

暫くすると、女中がN夫人の来訪を知らしてきた。私達は辞し去ろうとした。それを女主人は引止めた。そして彼女の言葉によると、N夫人は彼女の旧友で、今では善良な一家の主婦だが、以前は優れた歌人だつたそうである。

其処へN夫人がやつてきた。^(注8)セルの着物に小紋の縋の羽織を引っかけて、散歩ついでという様子だつた。私達はそれぞれ紹介された。私は何だか夫人に見覚えがあるような気もしたが、はつきり思い出せないので、「初めまして」と挨拶をして、丁寧に頭を下げた。

やがて私は、初対面のN夫人が加わつたために、妙につまらなくなつて、いつしか会話のケンガイに出て、立ち上つて庭の入口に出た。そして煙草を吹かしていると、N夫人は私の方へやつて来た。

「いっぞやお目にかかったことがあるようですが。」と彼女は落付いた微笑を浮かべながら云つた。

「そうでしたかしら……。」

私は振向いて彼女を眺めた。それから、襟元の黒子が眼についた。彼女だったのだ……あのみさ子は。

私は惘然^{ぼうぜん}として言葉もなく立竦^{すく}んだ。

「鎌倉からの汽車の中だったように私は覚えておりますが……。」と彼女は云った。

睫毛の長い黒目の小さな怪しい眼が、私を正面にじつと見つめながら笑っていた。私はあの時の無作法を揶揄^{てやう}されてるような気がして、冷たい汗が流れた。と共に、何ともいえない驚きを感じた。夫人は円満に出来上^{あがり}つてる女らしかった。どんな場合にも挙措^{きょそ}を乱さないだけの沈着と、一寸文学をも弄^{もよほ}べるだけの伶俐な才能と、家政をも整えてゆける手腕と、人を外らさぬ気転など、大抵の美德を具えていて、その代り、特殊な官能や、不幸に対する理解や、熱烈な情操などは、可なり欠けてるらしく見えた。一口にいえば、円満な平凡な現代婦人らしかった。そういうことを、私は彼女の全身から直覺的に感じて、みさ子と彼女との間に、心の据え場に迷った。

「あの時の……あれはあなたでしたか。」と私は漸くにして云った。

「ええ。あなたはもうお忘れなさいましたの？」

「それでも、何だか別な人のような気がするんです。ほんとにあなただったのですか。……そんなら、實際あの時は失礼しました。いやにあなたの顔ばかり見まして……。私はあの時一寸変な……夢を考えてたものですから。」

私は途切れ途切れにそんな風なコツケイ⁵な口を利いた。彼女は笑った。これから御交際を願いたいと云い出した。私はただ一言気の無い返事をした。そして友と女画家との方へ戻^{かへ}っていった。

暫くして私と友とは帰^{かへ}っていった。帰りながら私はN夫人のことを頭に浮べた。「下らないことを覚えていたものだ！」と考えた。そして彼女のことを頭の外に放り出した。郊外の野の上に、秋の晴々とした光りが一面に降り濺^{あそ}いでいた。私の心も晴々としていた。私はただみさ子のことを考えた。遠い昔の人でもあるかのように、或る一定の距離を置いて、しみじみとしたやさしい眼差で、彼女は私を眺めていた。落付いた静かな微笑が私の心に上^あってきた。

D
それから間もなく、私はみさ子の小説を書いた。

(注) 1 半白——白髪まじり。半分白髪がまざっていること。

2 茫とした盲いた——ぼんやりとしてはつきりしない様子。

3 井桁くずし——「井」字が変形して平行四辺形になった着物の模様的一种。

4 跛足——足の不自由な状態。

5 更紗模様——種々の色で綿布を染めた、インド・ジャワ・ペルシアなどの異国情緒のある模様。

6 腺病質——体格が貧弱で神経質そうな体質。

7 紹縮緬——織り目の透いた薄い絹織物の一種。

8 セル——羊毛などを原料とする毛織物の一種。

問一 傍線部1く5のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めよ。

問二 波線部a「狼狽した」、b「懇意な」の本文中における意味を、それぞれ一〇字以内で説明せよ。

問三

傍線部A「この黒子という新発見」とあるが、それまでの顔の部位の描写と比べて、この表現には「私」のどういう気持ちが表れているか。次のア、イの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 彼女の「目」や「鼻」にみさ子とは合わない部分があつても妥協点を探しており、「黒子」に対しても本来みさ子には考えていなかった造型であるが、許容の範囲だと自身を納得させようとしている。

イ 彼女の「鼻」や「唇」などの容姿と重ね合わせてみさ子の姿をはっきりさせていったのに対し、「黒子」についてはむしろ積極的に彼女からみさ子に取り入れる着想を得られたことに喜んでいる。

ウ 「額」や「眉」と同じように、彼女の「黒子」も思い浮かべていたみさ子にぴったりの姿態であつたことに、改めてこのみさ子のモデルとしてふさわしい「彼女」に出会えたことを感謝している。

エ みさ子の姿かたちについて長らく悩んでいたところ、彼女の「頬」や「顎」など輪郭を作ることができ、さらには「黒子」のようなより詳細な設定も決めることができ、救われた気持ちになつていた。

オ みさ子と彼女とを化粧や角度などの微調整で一致させようと苦心していたものの、彼女の「黒子」を見つけたことにより、いつそ従来のみさ子像を大きく変更すればよいという踏ん切りがついた。

問四

傍線部B「彼女の方を——みさ子の方を——見ては悪いような、また見ないで澄してるのも本意ないような、どうしていいか分らない気持だった。」とあるが、「見ては悪いような」と「見ないで澄してるのも本意ないような」というのはどういう気持ちか、それぞれ説明せよ。

問五

傍線部C「私はみさ子の小説を書かなかつた。書けなかつたのである。」とあり、傍線部D「それから間もなく、私はみさ子の小説を書いた。」とある。なぜ「私」がこのような行動の変化を起こしたのか、一五〇字以内で説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた）。（40点）

（注1）さりがたき人の、「歌詠むやう教へよ」と度々仰せられ候へども、^a「我がよく知りたる事をこそ人にも教へ候ふなれ、いかでかは」^{（注2）}といなみ申すを、あながちに恨み仰せられ候ふもわりなくて、すすろなる事を書き続け候ひぬるぞ。ゆめゆめ人に見せられ候ふまじ。^b

大方、昔よりこのやまと歌の道を得たる人々、末の世の人のために様々書き置きたるものども、^{（注3）}家々のもてあそび、人ごと^{（注4）}に習ふ事多く候へば、いまさらに「おろかなる言の葉にて、いづくを初めに申すべし」とも覚え候はず。「出る日」を「あかねさす」「久方の月」「足引の山」「玉鉦^{（注5）}の道」「むば玉の夢」などやうの事は、いづれの歌枕にもただ同じ事を申して候ふめり。ただ古きものどもをよくよく御覧ぜられ候ふべし。^c

これは、ただ年頃歌詠みと聞ゆる人のあたりにて、わづかに耳にとまり候ひし事の、老いぼれたる心地に、いささか思ひ出^dでられ候ふかたはしを申し候へども、さながら^{（注6）}ひが覚えにてぞ候ふらん。

（注7）『初学抄』と申して、清輔朝臣の書き置かれて候ふものにも、^A「歌など詠まんには、まづ題の心をよく心得べし」と候ふと覚え候ふ。又、「題の文字を上^Aの句にみな詠みはてて、下の句には言ひ事の無さに、すすろなる事どもを続けたる、いと見苦し」とて候ひき。「ある人、『山家卯花』と言ふ題にて、

山里のかきほに咲ける卯の花は

と詠みて、『末は何と詠むべし』とも覚え候はざりけるやらん、

(注8)
脇壁塗れる心地こそすれ

と詠みて候ひける、いとをかし」とて候ひき。それも様によりて、又上の句に題の文字言ひはてても苦しからぬ事も候ふにや。ことに恋の結題ども、題の理をあらはさず思はせたる事どもを、上手達は詠まれ候ふと覚え候ふ。遇不逢恋」と言ふ事を、京極中納言定家卿の歌と覚え候ふ、

D
色変る美濃の中山秋越えて又遠ざかる逢坂の関

かやうにぞ多く詠まれて候ふめる。我ならば、「逢ふて逢はざる恋ぞ苦しき」などやうにぞ詠まましと覚え候ふ。

(『夜の鶴』による)

(注) 1 さりがたき人——依頼を断れない相手。

2 いなみ申すを——お断りするのを。

3 家々のもてあそび——家ごとに秘伝とする歌学書。

4 「あかねさす」「久方の」「足引の」「玉鉾の」「むば玉の」——いずれも枕詞。

5 歌枕——ここでは歌枕を含む歌語等の事を書き記した書物をさす。

6 ひが覚え——記憶違い。

7 『初学抄』——歌学書。清輔朝臣(藤原清輔)の著作。

8 脇壁塗れる心地こそすれ——幅の狭い小さい壁を白く塗ったような気持ちがすることだ。「脇壁」は歌語ではない。

9 結題——題に従って和歌を詠む際に出される歌題の一種で、「霞」「夜雨」等とは異なり、「初春霞」「旅宿夜雨」等のように、漢字三、四字から成り、二つないしはそれ以上の事柄が結合した題をさす。

10 遇不逢恋——「アヒテアハザルコヒ」と訓む。結題の一種で、逢つて契つたのち疎遠になつてしまった恋。

11 京極中納言定家卿——鎌倉時代を代表する歌人藤原定家。

問一 二重傍線部 a ~ d の「られ」の中から、意味が異なるものを一つ選び記号で答えた上で、その文法的意味を答えよ。

問二 傍線部 A「歌など詠まんには、まづ題の心をよく心得べし」を現代語訳せよ。

問三 傍線部 B「いとをかし」について、どういうことが「いとをかし」なのか。「をかし」の意味を明らかにしながら、「山家卯花」の題で詠まれた和歌に即して説明せよ。

問四 傍線部 C「題の理をあらはさず思はせたる事ども」を詠んだ「遇不逢恋」の例歌として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 命とて逢ひ見むこともたのまれずうつる心の花のさかりは

イ はかなしな夢に夢見しかげろふのそれも絶えぬる中の契りは

ウ 逢ひて逢はぬ恋する人の又もあらば我を尋ねて問はましものを

エ 逢ふことのうれしかりしは昔にて今は涙ぞ袖にあまれる

オ 逢坂の関は越えにし東路をなど今更に又迷ふらん

問五 傍線部 D「色変る美濃の中山秋越えて又遠ざかる逢坂の関」は、「遇不逢恋」の題をどのように詠みこんでいるか、具体的に説明せよ。

第四問

次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた)。(40点)

李^(注5)千^(注1)之^(注1)侍^(注1)御^(注1)言^(注1)某^(注1)公^(注1)子^(注1)美^(注2)丰^(注2)姿^(注2)有^(注3)衛^(注3)玠^(注4)璧^(注4)人^(注4)之^(注4)目^(注4)
 雍^(注5)正^(注5)末^(注5)值^(注6)秋^(注6)試^(注6)於^(注7)豊^(注7)宜^(注7)門^(注8)内^(注8)租^(注8)僧^(注8)舍^(注8)過^(注8)夏^(注8)以^(注8)一^(注8)室^(注8)
 設^(注9)榻^(注9)一^(注9)室^(注9)読^(注9)書^(注9)毎^(注10)晨^(注10)興^(注10)書^(注10)室^(注10)几^(注10)榻^(注10)筆^(注10)墨^(注10)之^(注10)類^(注10)皆^(注10)弘^(注10)
 拭^(注11)無^(注11)纖^(注11)塵^(注11)乃^(注11)至^(注11)瓶^(注11)挿^(注11)花^(注11)硯^(注11)池^(注11)注^(注11)水^(注11)亦^(注11)皆^(注11)整^(注11)頓^(注11)如^(注11)
 法^(注12)非^(注12)粗^(注12)材^(注12)所^(注13)弁^(注13)忽^(注13)悟^(注13)北^(注13)地^(注13)多^(注13)狐^(注13)女^(注13)或^(注14)藉^(注14)通^(注14)情^(注15)慄^(注15)
 亦^(注16)未^(注16)可^(注16)知^(注16)於^(注16)意^(注16)亦^(注16)良^(注16)得^(注16)既^(注16)而^(注16)盤^(注16)中^(注16)稍^(注17)稍^(注17)置^(注17)果^(注17)餌^(注17)皆^(注17)
 精^(注18)品^(注18)雖^(注18)不^(注18)敢^(注18)食^(注18)然^(注18)益^(注18)以^(注18)美^(注18)人^(注18)之^(注18)貽^(注18)拭^(注18)目^(注18)以^(注18)待^(注18)佳^(注18)
 遇^(注19)一^(注19)夕^(注19)月^(注19)明^(注19)潜^(注19)至^(注19)北^(注19)牖^(注19)外^(注19)穴^(注19)紙^(注19)窃^(注19)窺^(注19)冀^(注19)睹^(注19)艷^(注19)質^(注19)
 夜^(注20)半^(注20)器^(注20)具^(注20)有^(注20)声^(注20)果^(注20)一^(注20)人^(注20)在^(注20)室^(注20)料^(注21)理^(注21)諦^(注22)視^(注22)則^(注22)修^(注23)髻^(注23)偉^(注23)

丈夫也。怖^レ而却走^シ。次日即^チ移^ス寓^(注24)。移^ル時承^(注25)塵^{じん}上^ニ似^{タリ}有^{ルニ}
 嘆^一聲。

(「閱微草堂筆記」による)

- (注) 1 侍御——公的な役職。 2 丰姿——風貌。 3 衡玠——西晋の時代、美男子として知られた人物(二八七—三一三)。
- 4 壁人——寶石のように美しい人。 5 雍正——清朝の年号(一七二三—一七三五)。 6 秋試——科挙の試験。
- 7 豊宣門——北京城の城門。 8 租——家賃を払って借りる。 9 榻——寝台。 10 晨興——朝早く起きる。
- 11 如法——しきたりどおりに。 12 粗材——凡庸な人。 13 弁——扱う。さばく。 14 藉——かこつける。
- 15 情慤——真心。 16 良得——ほぼ納得した。 17 稍稍——少しずつ。 18 精品——えり抜きの素晴らしい品。
- 19 牖——窓。 20 艶質——美女。 21 料理——整理する。 22 諦視——じつくりと視る。 23 修髯——長いほおひげ。
- 24 寓——宿。 25 承塵——天井板。

問一 傍線部A「忽悟、北地多狐女。或藉通情慤」とあるが、某公子はなぜこのように考えたのか、その理由にあたる部分の最初の五文字と終わりの五文字をそれぞれ答えよ。

問二 傍線部B「未可知於意」に訓点を付けよ。

問三 傍線部C「一夕月明、潜至北牖外穴紙窺窺」という行為の描写から、某公子の心理状態をどのように読み取ることができるか、説明せよ。

問四 傍線部D「承塵上、似有嘆声」という描写について説明したものとして、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 物語全体に不思議な余韻を与え、読者の想像力を刺激する効果がある。

イ 僧房を貸していた僧たちが某公子に去られたことを残念に思うさまを示す。

ウ 偉丈夫から逃げるために天井裏に上がった某公子が安堵しているさまを示す。

エ 某公子の後悔や失望を、某公子の行動をとおして間接的に表現している。

オ 物語の展開に明確な結論を与え、謎を解き明かし、読者の疑問を解消している。

問五 波線部「李千之侍御言」は、この物語全体にどのような影響を与えているか、次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 物語の歴史的背景と時代設定を明確にすることで、物語世界の具体性と説得力を高める。

イ 公的な立場にある者からの言葉として物語を提示することで真実味を感じさせる。

ウ 登場人物の行動や出来事の背景を浮かび上がらせ、読者の興味や関心を喚起する。

エ 物語の語り手を明らかにし、その人物の視点や解釈を通して話が進行することを示す。

オ 特定の人物の立場を読者に共有させ、その性格や状況にそった感情を追体験させる。

受験番号

得点

問
1
2
3
4
5

1

2

3

4

5

問三	
二つ目	一つ目

二つ目	一つ目
-----	-----

--	--

[illegible]

問五	
問六	

問二		問一
b	a	1
		2
		3
		4
		5

[illegible]

b	a
---	---

A blank coordinate grid with x and y axes ranging from -10 to 10. The grid is composed of solid lines for the axes and dashed lines for the interior grid lines. The x-axis is labeled from -10 to 10, and the y-axis is labeled from -10 to 10.

[illegible]

A blank coordinate plane with a horizontal x-axis and a vertical y-axis intersecting at the origin. The axes are represented by solid lines, and the four quadrants are separated by dashed lines. There are no tick marks or labels on the axes.

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

A blank coordinate plane with a horizontal x-axis and a vertical y-axis intersecting at the origin. The axes are represented by solid lines, and the grid lines are dashed.

問三

見ては悪いような

問四

見ないで澄してるのも
本意ないような

[illegible][illegible]

受 験 番 号

国語B 解答用紙 (二枚中 その二)

第三問

問一	問二	問三	問四	問五
〔記号〕				
〔意味〕				

第四問

問一	問二	問三	問四	問五
最初の五文字	未 可 知 於 意			
終わりの五文字				

B【解答例】

第一問

問一 1 添 2 あら（わ） 3 脱 4 おとめ 5 栄誉

問二 才

問三 1 人工色を混ぜると作られる絶対黒を排除し、色の明度を下げないように、絵の具を混ぜずに並置するなどの原色に近い状態で描く方法。

2 描画対象の輪郭や陰影を明確に描くのではなく、人間の知覚認識システムによって認識できる程度に色を配置して対象物を描く方法。

問四 モネがサロンに出品した当時、印象派では保守的なアカデミズムに反抗してサロンに出品しないという不文律を守る者たちと、主義をまげて生計のためにサロンに出品する者たちとの間で内部対立が起きていたという状況。

問五 イ

問六 ウ

第二問

問一 1 肝要 2 たわむ 3 から 4 圏外 5 滑稽

問二 a あわてふためいた／驚いてうろたえる

b 親しく交際している

問三 イ

問四 ・ 見ては悪いような ― 「彼女」という汽車で初めて会った知らない人をじろじろ見ることを失礼に思う気持ち。

・ 見ないで澄ましてるのも本意ないような ― 「みさ子」というよく知っているはずの人物に対し、気軽に声もかけず目も向けないことは望むところではないと思う気持ち。

問五 汽車での体験からみさ子が私にとって一人の親しい生きた女性となり、当初構想していたみさ子を遠くから眺める手法をとることができず、すぐには書けなくなっていた。だが、汽車の女をN夫人と認識し、N夫人とみさ子とが分離できたことで、みさ子が小説の存在に戻り、本来の構想で書くことができるようになった。

第三問

問一 d 自発

問二 和歌を詠む時には、第一に、和歌の題の意味（内容）を十分に理解していないといけない。

問三 上の句で題意を満たしてしまい下の句を詠むのに苦慮し、「卯の花」が白いことから「脇壁を白く塗ったような気持ちになる」と歌語とは言い難い詞を用いながら無理やり一首に仕立てたことが滑稽である。

問四 才

問五 題の「逢」や「恋」といった詞を用いずに、「美濃の中山」や「逢坂の関」等の地名を詠み込んだ秋の歌のように見せながら、「逢坂の関」という地名に恋人に逢う意を掛けたり、「秋」に「飽」を掛けつつ、「色変わる」「遠ざかる」等の心離れを連想させる語を組み合わせることで、題意を満たしている。

第四問

問一 最初の五文字 毎晨興書室

終わりの五文字 非粗材所弁

ダ カラ ル ヲ

問二 未可知於意

レ レ ニ 一

問三 噂に聞く魅惑的な存在との出会いへの期待と、その正体を自分の目で確かめたいという抑えきれない好奇心が読み取れる。

問四 ア

問五 イ